

若者の友人関係形成と携帯電話の社会的機能

辻 泉

1. はじめに

若者を取り囲むメディア環境の変化が著しい。とりわけパーソナル・メディアの急速な普及には目を見張るものがあり、中でも携帯電話・PHS（以下では、利用の実態に即して“携帯電話”と総称する¹⁾）は、すでに9割近い若者が保有しており、もはや“普及”の段階を過ぎ、高度な機能やデザイン面での“差異化競争”の段階に突入しつつある。

今日では、若者が友人関係を形成する第一歩として、互いの携帯電話の番号やメールアドレスを交換するといった光景は、すでに定着した感がある。筆者が行った事例調査においては、そのように収集した相手の連絡先を、携帯電話のメモリー機能に登録した上で（100件を超えることも多いという）、メールアドレスの変更を告げるメールを送信したときに、届かずに帰ってきてしまった連絡先を消去していくなどして、整理しているという対象者も見られた。言わば「メルアドの切れ目が縁の切れ目」である。

これは、以前に筆者が「“足し算”と“引き算”の繰り返し」と呼んだ、若者における友人関係形成のための工夫と同じものだといえる（辻泉 2001）。すなわち、番号やメールアドレスをできるだけ交換する“足し算”をしておいてから、徐々に疎遠になっていく相手を削ぎ落とす“引き算”を行い、この過程を繰り返すことで気の合う友人関係が形成されるというものである。こうした工夫を行う上で、確かに携帯電話は便利なものだろう。

しかし、それは結局のところ、どのような役に立っていることになるのだら

うか。例えば、人数を増やすのに役に立つのか、それともまた別な側面で役に立つのか。社会学的な言い方をすれば、若者の友人関係の形成に対して、携帯電話はどのような社会的機能を果たしているのだろうか。これを明らかにすることが本論の目的である。

この点については、すでにいくつもの議論が存在している。しかし多くの場合、役に立つか、あるいは立たない側面だけを強調しすぎるきらいがあり、また思弁的なものが多く、実証的な研究にはまだ乏しいのが現状である。

そこで本論では、筆者もメンバーの一員である研究グループ(青少年研究会：代表高橋勇悦大妻女子大学教授)が、2002年に東京都杉並区と兵庫県神戸市灘区・東灘区に在住する若者を対象に行った、質問紙調査の結果を元に、この点について実証的に検討することを目的とする。

その際、主な分析の指針としては、友人関係の形成において、携帯電話が「役に立った」と答えた若者とそうではない若者とを比較検討することにした。前述の通り、携帯電話を保有する割合自体は9割近いが、友人関係の形成に携帯電話が「役に立った」と答えた若者は半数程度であった。では、これらの若者の間には、友人関係に関して、いかなる差が生じているのだろうか。この点を実証的に検討することで、若者の友人関係に対し、携帯電話が果たす社会的機能をよりの確に理解することが出来よう。

その際、すでに拙論で指摘してきたように(辻泉2001)、複数の側面から友人関係を検討することが重要である。複数とはすなわち、人数などの形式的な側面と、友人がもつ意味などの内容的な側面である。これまでの議論は、これらの区別が曖昧であったり、あるいはいずれかの側面だけを、否定あるいは肯定的に論じてきた傾向がある。しかしながら、いずれも重要な側面である以上、あわせて検討することでよりの確な理解が可能となるだろう。

2. 若者の友人関係に関する先行研究

拙論(辻泉2001)で整理したように、近年、若者の友人関係をめぐっては、

「希薄化」論と「選択化」論と呼びうるような議論が存在していて、後者が前者に批判を行っている。要点を整理しよう²⁾

2-1 「希薄化」論

「希薄化」論というのは、主に若者心理学や精神分析などに見られるタイプの議論であり、新たなパーソナル・メディアの普及や各種マス・メディアの発達に対し、否定的な論調を持ちやすい。ポイントは、若者の友人関係が「希薄化」といった場合に、主にその内容的な側面に注目しているという点である。

例えば、松井（1990, 1996）のまとめによれば、若者が友人に対して主観的に感じる意味としては、大きく分けて①好感・親密感、②尊敬・肯定的評価、③劣等感・競争意識の3つが含まれており、そうした友人は若者の社会化過程において、①安定化、②社会的スキルの学習、③モデルという3つの機能を果たすのだという³⁾

その上で「オタク」や「ひきこもり」のような特徴的な事例を取り上げながら、例えば部活動に所属するものの割合が減少傾向にあることと、各種メディアの普及が同時並行的であることなどに触れながら、かつてと比べ若者は“自閉”しつつあり、それゆえ若者における友人という概念の意味するところがかなり狭まってしまい、友人の社会化機能が果たされなくなってきているのではないかと危惧するのである。岡田（1992：28）などは「現代人とくに若者期における友人関係は全体として希薄化・表面化の方向に向かいつつある」とした上で、「近い将来『友人関係』などという章は心理学の教科書から消滅してしまうかもしれない」とすら述べている。

2-2 「選択化」論

一方で「選択化」論は、前述の青少年研究会の1992年調査に代表されるような、近年の社会学的な若者調査から登場してきたタイプの議論である。「希

薄化」論に批判的であることからして、新たなパーソナル・メディアの普及や各種マス・メディアの発達に対しては、どちらかといえば肯定的な論調を持つといえる。そのポイントは、「希薄化」論が見落としている、形式的な側面の変化に注目しているという点である。

例えば、部活動の停滞のように、若者が既存の集団・組織に十全にコミットしていないのは事実としても、過去の調査と比較した場合、若者の友人の人数はむしろ増加傾向にあり、必ずしも彼／彼女らが“自閉”しているとは言えないという。そこで浅野（1999）や辻大介（1999）の解釈によれば、今日の若者は、いずれかの集団・組織の中だけで“唯一の深い友人関係”を形成するのではなく、むしろ複数の親しい友人関係（と自分自身）の使い分けを遂行できるような傾向が見られ、“自閉”というよりも“選択”的な友人関係とした方が妥当であるという。加えて、松田（2000）によれば、そうした若者のふるまいは、例えば「番通選択」のように、着信通知によって出るか否かを選択できるような携帯電話の機能に適合的であり、ゆえに携帯電話の普及は、こうした若者の友人関係の新たな傾向に適合的であるという。

2-3 先行研究の問題点

こうした議論の対立図式自体は、「疎外」を嘆く議論に対して、状況に適合した個々人の、主体的な関係形成をポジティブに捉える議論が批判を加えるという構図であり、新しいというよりむしろ見慣れたものである。しかし、いくつかの問題点がある。

第1に、議論が対立しているようでいて、実は微妙に論点がズレている。「希薄化」論は若者が“自閉”することで、友人の意味や社会化機能が変化するのではないかと危惧しているのだが、「選択化」論は、若者の友人関係はむしろ“選択”的なのではないかと指摘するのに止まっており、友人の意味といった点にまでは言及していない。即ち、「希薄化」論は友人関係における内容的な側面に注目をしているのに対し、「選択化」論は形式的な側面に注目をしてい

るのである。この両側面は関連づけて論じたほうが望ましい。

第2に、今日的な若者の友人関係の実態に関する、実証的な研究が少ないという問題点がある。論点のズレも、こうした点によるのかもしれないが、とりわけ後発の「選択化」論は、量的な質問紙調査の意識項目を中心とした回答結果を、事後的に解釈した結果から導かれた仮説段階の議論に過ぎず、実態把握を通して十二分に深められているとは言いがたい。確かに、「希薄化」論が形式的な側面の変化に対する視点を欠落させているという批判は妥当だが、そうした新たな状況を捉えようとするのなら、詳細な実態把握を、積み重ねていく必要がある。

新しい変化については、どうしても思弁的で論調の偏った議論が先立ちやすい傾向がある。とりわけ若者に関するこれまでの議論は往々にしてそうした傾向があった。

しかし本論では、こうした問題点を乗り越えるために、社会学的機能主義の立場から分析を試みる。すなわちいずれかの論調に偏らずに、若者、ないしその友人関係を準拠点に、あくまで調査の分析結果からわかる範囲内で、携帯電話の社会的機能を明らかにする⁴⁾

3. 分析①～メディア利用の比較

3-1 分析にあたって

分析に用いる調査データの詳細は以下の通りである。調査の実施主体は青少年研究会であり、東京都杉並区と兵庫県神戸市灘区・東灘区在住の16～29歳の男女を母集団に、層化二段無作為抽出によって得られた2,000名（各地域1,000名ずつ）を対象に、2002年9月19日～10月21日の間に実施された。調査方法は調査員による訪問留置回収法であり、各地域とも55.5%にあたる、それぞれ550名（合計1,100名）から回答を得た。なお調査の名称は「若者の意識と行動に関する調査」であり、主な内容としては、メディアの利用実態、友人関係、自己意識、社会意識などを含むが、本論では、主にメディアの利用

実態と友人関係について分析する。質問文の詳細や、他の項目に関する結果などについては、同研究会発行の報告書をご参照いただきたい（なお以降の本文では、調査票における質問番号を付記しておく）。

ここで再度、分析の指針を確認しておく。携帯電話が友人関係の形成に「役に立った（Q16）」と答えた若者とそうでない若者との間で、友人関係の形式的側面（例えば人数＝Q13など）や内容的側面（例えば、親友の意味＝Q13 SQ1など）がどのように異なっているのか分析し、その結果の範囲内において、携帯電話の若者の友人関係に対する社会的機能を解釈するということがあった。

よって、友人の人数（Q13）については、親しさの度合いに応じて「親友」「仲のよい友だち」「知り合い程度の友だち」の3つにわけて尋ねているので、特にどの種類の友人の人数が違ってくるのかまで詳細に検討を加える。また、先にも述べたように、そうした形式的側面と内容的側面を合わせて理解する研究も前例が少ないため、貴重な結果が得られるものと思われる。

なお分析にあたっては、主にクロス表分析を用い、 χ^2 乗検定を行う。また平均値の比較にあたっては、T検定を行う。検定の結果についてはそれぞれの表中にアスタリスクで記し、***は0.1%水準で、**は1%水準で、*は5%水準で、それぞれ有意差があることを示す。また東京都杉並区（以下、杉並と表記）と兵庫県神戸市灘区・東灘区（以下、神戸と表記）の結果を別々に分析するので、検定結果については、“(杉***, 神*)”のように表中に略記する。

3-2 友人関係の形成に役立ったメディアは何か

冒頭に記したように、携帯電話保有の割合自体は本調査の結果を見ても9割近いものの、果たして携帯電話が友人関係の形成に役立った若者は、どれほど存在しているのだろうか。次の表1は、若者が日常的によく利用する他のメディアも含め、友人関係を形成する時に役立ったことのあるものを複数回答で選んでもらった結果である（Q16）。すると、杉並、神戸のいずれにおいても、

携帯電話の割合が最も大きく（それぞれ46.9%、53.5%）、ついで（杉並では同じ割合で）テレビ番組の話題となっている（それぞれ46.9%、49.6%）。このことから、携帯電話は若者の友人関係形成の上で重要なメディアであり、ほぼ半数の若者が、友人関係の形成において、役立ったと答えていることがわかる。

以下では、この場合に携帯電話が「役立った」と答えた若者と、「役立っていない」と答えた若者との間でどのような違いが見られるのかを比較検討する。特に断り書きのない場合，“「役立った若者」”とは友人関係の形成に携帯電話が「役立った」と答えた若者のことであり，“「役立っていない若者」”とは同様に「役立っていない」と答えた若者のことである。

表1 友人関係の形成に役立ったメディア (Q16)

「役に立った」と答えたものの% (MA)	杉並	神戸
	(N = 550)	(N = 550)
1. テレビ番組の話題	46.9	49.6
2. テレビゲームの話題	16.5	14.7
3. インターネットのサイト	12.9	11.6
4. 携帯電話等での通話やメール	46.9	53.5
5. 固定電話での通話	8.2	8.7

3-3 メディア利用の比較

ではまず、「役立った若者」と「役立っていない若者」との間でメディアの利用がどのように異なるのか、携帯電話とそれ以外のメディアに分けて検討しよう。

3-3-1 携帯電話の諸機能の利用

次の表2は携帯電話での通話を(Q9④)、表3はその他の諸機能について(Q9SQ1, Q9SQ2)、利用しているか否かを表記したものである。

表2 携帯電話の通話の利用 (Q16-4×Q9④)

利用しているものの%	杉並 (N = 542)			神戸 (N = 544)		
	役立った	役立っていない	合計	役立った	役立っていない	合計
携帯電話での通話 (杉***, 神***)	87.6	71.5	79.2	83.0	67.6	75.9

表3 携帯電話の諸機能の利用 (Q16-4×Q9SQ1, Q9SQ2)

利用しているものの%	杉並 (N = 481)			神戸 (N = 473)		
	役立った	役立っていない	合計	役立った	役立っていない	合計
携帯メール (杉*, 神***)	94.4	88.8	91.7	96.3	85.3	91.5
携帯メモリー (杉 n. s., 神**)	95.2	96.1	95.6	96.7	90.7	94.1
グループ分け (杉*, 神***)	63.7	53.6	58.8	63.6	45.6	55.8

表2, 表3のいずれを見ても, 大きな傾向として「役立った若者」のほうが, 携帯電話の諸機能を利用する割合が高いということがわかる。また利用する頻度についても, 例えば表4にあるように, 携帯電話で一日に送受信するメール (Eメール, ショートメールを含む) の件数も, 杉並, 神戸とも「役立った若者」の方が有意に多い。

表4 携帯メールの利用頻度⁵⁾ (Q16-4×Q9SQ1)

平均値	杉並 (N = 468)		神戸 (N = 457)	
	役立った	役立っていない	役立った	役立っていない
携帯メールの送受信数/日(杉**, 神***)	12.1	8.9	14.3	8.2

さて, ここで特に興味深いのは, 携帯電話の利用について, 通話やメールといった連絡手段としてだけでなく, メモリー機能やそこでのグループ分けといったような, 連絡先のデータベースとしての利用にも差が見られるということだろう。先の表3では, 携帯電話を保有している若者の中で, 携帯メモリーを利用している (=連絡先を登録している) ものは, 杉並では95.6%, 神戸では94.1%に達しており, このうち神戸だけで, 「役立った若者」のほうがより利用率が高くなっていった。さらに携帯メモリーの中でのグループ分けを利用している若者は, 杉並では58.8%, 神戸では55.8%おり, いずれも「役立っ

た若者」のほうが利用する割合が高くなっていた。

また表5にあるように、携帯メモリーを利用している若者の中で、登録件数の平均値を比較してみると、杉並では「役立った若者」107.2件：「役立っていない若者」86.5件、神戸でも「役立った若者」97.4件：「役立っていない若者」79.1件と、いずれも「役立った若者」の方が携帯メモリーの登録件数が有意に多い結果となった（なお表6にあるように、グループ分けの数の平均値については、有意差はなかったが、これはグループ分けをする若者自体が半分程度に限られているためと思われる）。

表5 携帯メモリーの登録件数 (Q16-4 X Q9 SQ2)

平均値	杉並 (N = 460)		神戸 (N = 441)	
	役立った	役立っていない	役立った	役立っていない
携帯メモリーの登録件数(杉**、神**)	107.2	86.5	97.4	79.1

表6 グループ分けの数 (Q16-4 X Q9 SQ2)

平均値	杉並 (N = 272)		神戸 (N = 264)	
	役立った	役立っていない	役立った	役立っていない
グループ分けの数(杉 n. s., 神 n. s.)	6.9	6.3	6.6	6.1

このように見てくると、「役立った若者」たちは、携帯電話を、通話やメールをする連絡手段としてだけでなく、連絡先のデータベースとしても上手に利用しながら、友人関係の形成に役立っているのではないかと思われる。

では次に、他のメディアの利用についても比較しておこう。

3-3-2 その他のメディアの利用

表7は、テレビやテレビゲーム、固定電話、インターネットなどといったメディアの利用について分析したものである(Q16)。杉並でのみ、インターネットの利用について、「役立った若者」77.5%：「役立っていない若者」69.7%と、やや「役立った若者」のほうが割合が高くなっているほかは、差が見られない。

むしろ注目すべきは、固定電話の利用率の低さであろう。本調査の結果から

も明らかのように、保有している割合自体は携帯電話とほとんど変わらないが、利用している割合となると、杉並で47.2%、神戸では38.2%と半数を割っている。逆にこのことは、若者における連絡手段が、全体的に固定電話から携帯電話へと移行していることを示しているのだと言えよう。

表7 他のメディアの利用 (Q16-4×Q9)

利用しているものの%	杉並 (N = 542)			神戸 (N = 544)		
	役立った	役立っていない	合計	役立った	役立っていない	合計
テレビの視聴 (杉 n. s., 神戸 n. s.)	93.4	89.8	91.5	90.8	91.6	91.2
テレビゲームの利用 (杉 n. s., 神戸 n. s.)	36.0	33.5	34.7	27.6	27.2	27.4
固定電話での通話 (杉 n. s., 神戸 n. s.)	46.9	47.5	47.2	39.8	36.0	38.1
インターネットの利用 (杉*, 神戸 n. s.)	77.5	69.7	73.4	69.4	61.6	65.8

4. 分析②～友人関係の比較

次に、「役立った若者」と「役立っていない若者」との間で、友人関係に異なる違いが生じているのかを検討しよう。先に記したように、先行研究における争点のズレを解消するため、友人関係の形式的・内容的の両側面を検討する。ここでは前者の側面として、友人の人数を (Q13①～③)、後者の側面として親友の意味や機能を取り上げる (Q13SQ1)。

果たして、携帯電話が「役立った」ことで、友人は多くなるのだろうか、それとも少なくなるのだろうか、また友人の持つ意味や機能は違ったものになるのだろうか。

4-1 友人関係の形式的側面の比較

本調査では、友人関係の形式的側面をより正確に把握するために、友人を3つの種類に分けた上で、それぞれの人数を尋ねている⁹⁾。すなわち親しさの度合いに応じた、Q13①「親友 (恋人を除く)」、Q13②「仲のよい友だち」、Q13③「知り合い程度の友だち」という3つである。

表8 友人の人数総合計⁷⁾ (Q16-4×Q13)

平均値	杉並 (N = 484)		神戸 (N = 480)	
	役立った	役立っていない	役立った	役立っていない
①～③の合計 (杉***, 神***)	62.4	45.6	57.1	41.9

まずこれらの3つを足し合わせた、友人の人数の総合計を検討しよう。表8にあるように、杉並、神戸のいずれにおいても、友人の人数の総合計は「役立った若者」の方が多くっており、杉並では「役立った若者」62.4人：「役立っていない若者」45.6人、神戸では、「役立った若者」57.1人：「役立っていない若者」41.9人となっている。では、親しさの度合いに応じて3つに分けると、どの種類の友人の人数で差が大きいのだろうか。

表9 「親友」の人数 (Q16-4×Q13①)

平均値	杉並 (N = 483)		神戸 (N = 496)	
	役立った	役立っていない	役立った	役立っていない
①親友の人数 (杉*, 神 n. s.)	4.3	3.6	4.5	4.1

表10 「仲のよい友だち」の人数 (Q16-4×Q13②)

平均値	杉並 (N = 503)		神戸 (N = 510)	
	役立った	役立っていない	役立った	役立っていない
②仲の良い友だちの人数 (杉**, 神*)	16.8	13.5	16.1	13.2

表11 「知り合い程度の友だち」の人数 (Q16-4×Q13③)

平均値	杉並 (N = 491)		神戸 (N = 476)	
	役立った	役立っていない	役立った	役立っていない
③知りあい程度の友だちの人数 (杉***, 神***)	42.0	30.1	37.0	26.4

表9は「親友」の、表10は「仲のよい友だち」の、表11は「知り合い程度の友だち」のそれぞれ人数を比較したものである。「親友」については、杉並において、「役立った若者」4.3人：「役立っていない若者」3.6人と若干差が開いているが、神戸では有意差が見られない。一方、「仲のよい友だち」については、杉並では「役立った若者」16.8人：「役立っていない若者」13.5人、神戸

でも「役立った若者」16.1人：「役立ってない若者」13.2人といずれも「役立った若者」の方が多く傾向が見られるし、「知り合い程度の友だち」については、杉並で「役立った若者」42.0人：「役立ってない若者」30.1人、神戸で「役立った若者」37.0人：「役立ってない若者」26.4人とそれぞれ10人以上「役立った若者」の方が多く結果となっている。

このように見てくると、形式的な側面に関しては、友人関係の形成に携帯電話が「役立った」若者の方が、総じて友人の人数が多く、かつその中でも「知り合い程度の友だち」のような親しさの度合いの高くない友人の人数が多い傾向が指摘できる。

このことを、冒頭で触れたように、事例調査の知見である「足し算と引き算の繰り返し」と重ね合わせると次のように解釈できるのではないだろうか。すなわち、若者が友人関係を形成する際に、できるだけ多くの携帯電話の番号やメールアドレスを集めるのは（＝足し算）、まず「知り合い程度の友だち」を可能な限り確保し、その中から疎遠になっていくものを削ぎ落としていくことで（＝引き算）、「仲のよい友だち」や「親友」を確実に形成しようとする工夫なのではないだろうか、と。それゆえに、「役立った若者」の方が親しさの度合いの高くない友人の人数が多くなるのは、「足し算」によって、そうした友人を確保しようとしているからなのではないだろうか。

このことからすると、さらに、先に携帯メモリーの登録件数を検討した表5と、友人の人数の総合計を検討した表8を比較した場合に、明らかに携帯メモリーの登録件数の方が多くなっていることから、おそらく携帯メモリーには「親友」「仲のよい友だち」「知り合い程度の友だち」よりもさらに広がった連絡先が登録されていることも予測できる。筆者が、携帯メモリーに登録された連絡先の分析を行った事例研究の知見からすると（辻泉 2003⁸⁾）、おそらく家族や自宅、店舗、あるいはさらに親しさの度合いの低い相手などがこれにあてはまってくるものと思われる。

4-2 友人関係の内容的側面の比較

では次に、そのように形式的側面に違いが生じているとすると、内容的側面ではどのような違いが生じるだろうか。

筆者は「引き算と足し算の繰り返し」について、さらにそれが過度になされると、気の合わないものばかりが除外されて、その結果、友人の人数が増えたとしても、むしろ同質性が高まる可能性がある」と指摘したことがある（辻泉 2001）。この場合、同質性が高まるというのは、友人の持つ意味や社会化機能の多様性が失われたり、あるいは同じ属性のものばかりになるということである。特に筆者が指摘したのは、松井（1990, 1996）のまとめにしたがえば、意味の中でも好感・親密感に特化することで、社会化機能も安定化に特化し、それ以外の意味や機能が薄れてしまうのではないかということであった。

本調査ではこうした内容的側面について、同様に松井（1990, 1996）のまとめを参考に、Q13①で尋ねた「親友」が持つ意味や機能について尋ねる質問を設定している（Q13SQ1）。すなわち、意味については、好感・親密感にあたるのが「1. 一緒にいると楽しい」「2. 親しみを感じる」、尊敬・肯定的評価が「3. 尊敬している」「9. 自分の弱みをさらけ出せる」、劣等感・競争意識が「4. ライバルだと思う」「5. 劣等感を感じる」である。また社会化機能については、安定化にあたるのが「6. 一緒にいると安心する」、社会的スキルの学習が「7. 真剣に話ができる」「8. 親友のおかげで友だちづきあいがうまくなった」、ケンカをしても仲直りできる、モデルが「11. 親友のような考え方や生き方をしてみたい」である。

またこれ以外に満足度として「12. 親友との関係に満足している」という項目も設定した。結果は表 12 の通りである。

表12 親友の意味・社会化機能 (Q16-4×Q13SQ1)

あてはまるもの% (MA)	杉並 (N = 483)			神戸 (N = 496)		
	役立った	役立っていない	合計	役立った	役立っていない	合計
1. 一緒にいると楽しい(杉***, 神*)	90.9	77.8	84.1	84.2	75.8	80.4
2. 親しみを感じる(杉 n. s., 神*)	76.6	69.0	72.7	71.8	62.8	67.7
3. 尊敬している(杉*, 神 n. s.)	48.5	38.1	43.1	41.4	42.2	41.7
4. ライバルだと思う(杉 n. s., 神 n. s.)	24.2	20.2	22.2	23.8	23.3	23.6
5. 劣等感を感じる(杉 n. s., 神 n. s.)	8.2	6.3	7.2	10.3	5.8	8.3
6. 一緒にいると安心する(杉***, 神 n. s.)	70.1	52.0	60.7	56.8	48.9	53.2
7. 真剣に話ができる(杉*, 神 n. s.)	84.0	76.6	80.1	79.9	78.5	79.2
8. 友だちづきあいがまくなった(杉 n. s., 神*)	18.2	12.3	15.1	16.8	9.4	13.5
9. 自分の弱みをさらけ出せる(杉*, 神 n. s.)	64.9	54.8	59.6	62.6	56.5	59.9
10. ケンカをしても仲直りできる(杉**, 神*)	58.4	43.7	50.7	55.7	44.8	50.8
11. 考え方や生き方をしたい(杉 n. s., 神 n. s.)	16.0	11.1	13.5	18.3	12.1	15.5
13. その他(杉 n. s., 神 n. s.)	3.0	4.4	3.7	3.3	4.5	3.8
12. 親友との関係に満足(杉 n. s., 神 n. s.)	62.8	56.0	59.2	55.3	48.0	52.0

すると、確かに「一緒にいると楽しい」といった好感・親密感にあたる項目は、全体的に見ても割合が高く、かつ杉並、神戸のいずれにおいても、「役立った若者」の方が、割合が高い。しかし、「尊敬している」という尊敬・肯定的評価にあたる項目は、杉並、神戸とも全体では半数弱であるものの、杉並においては、むしろ「役立った若者」の方が割合が高い。

また社会化機能の中で安定化にあたる「一緒にいると安心する」については、杉並においては「役立った若者」の方が割合が高いが、神戸では有意差は見られない。むしろ「ケンカをしても仲直りできる」といった社会的スキルに関する項目では、杉並、神戸のいずれにおいても「役立った若者」の方が割合が高い。

このように見てくると、確かに好感・親密感といった意味や、安定化といった機能の割合が相対的に高いものの、それだけに特化しているとはいえないように思われてくる。そこで、こうした意味や機能の多様性を比較するために、

表12において、満足感を除いた12の項目について、あてはまった個数の平均値を比較してみたのが、表13である。この結果からすると、杉並では「役立った若者」5.6個：「役立ってない若者」4.7個、神戸では「役立った若者」5.3個：「役立ってない若者」4.8個といずれも「役立った若者」の方が多い。よって、「親友」の持つ意味や社会化機能については、むしろ「役立った若者」の方が多様性が高いと言える。

表13 親友の意味・社会化機能の多様性 (Q16 - 4 × Q13SQ1)

Q13SQ1の1~11, 13で「あてはまる」の個数	杉並 (N = 479)		神戸 (N = 488)	
	役立った	役立ってない	役立った	役立ってない
親友の意味・社会化機能の個数 (杉***, 神**)	5.6	4.7	5.3	4.8

この点は、現状においては、筆者が想定したほどには「足し算と引き算の繰り返し」が過度なものになっていないか、あるいはすでに分析した通り「役立った若者」の方が、友人の人数の総合計が多いために、確率論的に多様な「親友」と出会いやすいからではないかと思われる。

しかし、属性について検討してみると、やや違った結果が得られた。本調査では、「親友」については、男女別にも人数を尋ねており、そこから「異性の親友」がいるかどうかがわかる。つまり性別という属性に関して、「異性の親友」がいる方が多様性が高いと言える。しかし、表14にあるように、「役立った若者」と「役立ってない若者」との間で、「異性の親友」のいる割合については、有意差がなかった。本調査では尋ねていないが、さらに年齢などもあわせて、属性面での多様性も検討をする必要があるだろう。

表14 「異性の親友」がいるかないか (Q16 - 4 × Q13①)

あてはまるものの%	杉並 (N = 481)			神戸 (N = 497)		
	役立った	役立ってない	合計	役立った	役立ってない	合計
異性の親友がいる (杉 n. s., 神 n. s.)	32.2	27.1	29.5	35.2	27.2	31.6

5. ま と め

5-1 考 察

以上、携帯電話が友人関係の形成に「役立った若者」と「役立っていない若者」との比較分析から得られた知見は次のとおりである。

- (1) 「役立った若者」は「役立っていない若者」と比べ、携帯電話の通話やメールの利用だけでなく、携帯メモリーの利用やその登録件数、あるいはグループ分けの利用などにおいて上回っていた。よって、若者における友人関係の形成に関して、携帯電話がその技術的な側面から果たす機能としては、通話やメールのような連絡手段だけではなく、携帯メモリーやそのグループ分けのような連絡先のデータベースという点も重要であったといえる。
- (2) (1)とも関連するが、「役立った若者」は「役立っていない若者」と比べ、友人の人数が多く、特に「知り合い程度の友だち」などで差が目立った。よって携帯電話は、若者における友人関係の形成に関し、特にその形式的側面において、「知り合い程度の友だち」のような親しさの度合いの高くない友人関係を増加させる可能性が示唆され、「希薄化」論が危惧するような論点は、少なくとも形式的な側面においては当てはまっていなかった。また形式的な側面について、「選択化」論が示唆したような「選択的」な友人関係については、次の表15にもあるように、杉並、神戸とも、「⑦遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている」という項目に肯定的に回答したものの割合は「役立った若者」の方が多い。しかし、これは若者の主観的な意識面での「選択」であり、実際の友人関係の形式的側面が「選択的」であるかどうかは、さらなる検討を深める必要があるだろう。
- (3) 「役立った若者」は「役立っていない若者」と比べ、「親友」の持つ意味や社会化機能のあてはまる項目数が多かったが、「異性の親友」がいる割合については有意差が見られなかった。よって内容的側面について、携帯電話が友人関係の形成に役立つことで、「親友」の持つ意味や社会化機能の多様性を

むしろ増加させる可能性が示唆され、「希薄化」論が危惧した点は、内容的側面でも当てはまっていなかったといえる。しかし「親友」の性別といった属性に関しては、さらに詳細な検討が必要である。

表15 友人関係に対する意識 (Q16 - 4 × Q14)

「そうだ・どちらかといえばそうだ」の%	杉並 (N = 542)			神戸 (N = 544)		
	役立った	役立っていない	合計	役立った	役立っていない	合計
①友だちをたくさん作る(杉**, 神***)	57.8	46.1	51.7	61.2	42.0	52.4
②ひとりが落ち着く(杉 n. s., 神**)	41.9	49.3	45.8	39.8	53.6	46.1
③友だちとの関係はあっさり(杉 n. s., 神***)	43.8	51.1	47.6	35.4	55.2	44.5
④納得がいくまで話し合い(杉 n. s., 神 n. s.)	49.6	48.2	48.9	51.0	51.2	51.1
⑤友だち同士を引き合わせ(杉 n. s., 神 n. s.)	28.3	22.5	25.3	22.8	20.4	21.7
⑥初対面でもすぐに友だち(杉 n. s., 神 n. s.)	53.1	45.4	49.1	54.8	46.4	50.9
⑦友だちを使い分け(杉**, 神**)	72.1	58.8	65.1	70.7	59.2	65.4
⑧連絡をとっていないと不安(杉**, 神***)	24.0	14.4	19.0	25.2	11.6	18.9

5-2 今後の研究課題

今回の分析は、ある一時点における調査結果の分析に過ぎず、若者の友人関係に対する携帯電話の社会的機能を正確に把握するためには、今後も同じような視座から研究を継続していく必要がある。以下、そのための課題や展開について、いくつか触れておきたい。

5-2-1 携帯電話が友人関係の形成に役立っていたのは誰か

携帯電話を保有する割合自体は、若者ではほぼ9割に達しており、「普及」の段階は過ぎたかに見える。しかし、それが友人関係の形成に「役立った」と答えた若者は半数ほどであった。ではこの割合は今後増加するのだろうか。

次の表16は、本調査の回答者を年齢に応じて二分し、それぞれ「第1世代(23~29歳)」と「第2世代(16~22歳)」と名づけた上で、「役立った若者」の含まれる割合を比較したものである。この命名は、携帯電話の急速な普及を

鑑みると、「第1世代」はちょうど大学生以上の年齢のとき、「第2世代」は高校生以下の年齢のときに、それぞれ経験した世代といえる。いわば「第2世代」は、ライフステージ上において、友人関係の形成の盛んな時期にすでに携帯電話が普及していた世代なのである。表を見ると、杉並、神戸のいずれにおいても「第2世代」の方が「役立った若者」の占める割合が多くなっているのがわかる。

また同じように、男女別に「役に立つ若者」が含まれる割合を比較してみると（表17）、杉並、神戸のいずれにおいても、女性の方が男性と比べて割合が高いことがわかった。

表16 世代差 (Q16 - 4 × F1)

「役に立つ」と答えたものの%	杉並 (N = 540)			神戸 (N = 544)		
	第1世代	第2世代	合計	第1世代	第2世代	合計
携帯電話等での通話やメール(杉**, 神**)	42.0	53.4	47.6	47.7	61.0	54.0

表17 男女差 (Q16 - 4 × F1)

「役に立つ」と答えたものの%	杉並 (N = 540)			神戸 (N = 544)		
	男	女	合計	男	女	合計
携帯電話等での通話やメール(杉*, 神**)	42.4	52.1	47.6	47.5	59.1	54.0

世代差については、それがライフステージ効果であって、いつの時点でも年長者の方が少なく答える傾向があるだけなのか、それともコーホート効果として、今後「第3世代」「第4世代」とますますそうした割合が増えていくのか、今回の結果だけではわからないが、いずれにせよ注視し続けるべき重要な論点であるといえよう。

そして、そこにジェンダーによる差も生じている。新たなメディアは、誰に対しても同じように普及するとは限らないし、また友人関係についても、ジェンダーによって構造化された差異が生じている側面もあるだろう。こうした複数の要因が絡み合う中で、変化する2つのネットワーク（新しいメディアのネットワークと若者の友人関係のネットワーク）の様子を的確に捉えて行くことこ

そがまさに現下の急務に他ならないのである。

5-2-2 島宇宙化か、デジタルデバイドか

もう少しだけ、今後の展望について筆を進めておこう。宮台真司(1994)は、今後、若者たちは個別な集まりへと分散化していき、それぞれが互いに無干渉になり、あたかも等価な島宇宙がいくつも並列するような状況が訪れるのではないかと述べた(「島宇宙化」論)。しかし、今回の結果からすると、この議論はいささか単純化しすぎている嫌いがあるように思われてくる。

例えば、今回の結果においては、「役立った若者」と「役立ってない若者」がほぼ半数ずつ存在しており、その間には友人の人数など、いくつかの点で大きな差が見られた。宮台のいう「島宇宙化」が進むとしたら、こうした差はいずれなくなっていくものなのだろうか。むしろ逆にそこにジェンダーによって構造化された差異が絡み合うことで、むしろそうした差がさらに広まっていくことは考えられないだろうか⁹⁾。

すなわち、携帯電話によって友人関係がひたすら増加する一群と、逆にそうした動きに取り残される一群とに若者が分かれるような可能性はないのだろうか。もし、そのような事態が起こったとしたら、これもある種の「デジタルデバイド」と呼ぶことができるだろう。

いずれにせよ、本調査の結果の分析からは外れるため、これ以上の検討は差し控えるが、変化がますます急速になってきているからこそ、地道なアプローチの継続をしていくことが重要であると考ええる。

注

- 1) ただし、本調査の調査票においては“携帯電話等”と表記した。
- 2) こうした議論の対立状況についての詳細は、拙論(辻泉 2001, 2003)を参照のこと。
- 3) 例えば、気が合う友人と接するうちに心理的な不安が解消したり(①安定化)あるいは人と接する能力が増したりして(②社会的スキルの学習)、さらに尊敬または競争意識をもつような友人からはその行動や考えを真似ることで生き方の手本となる(③モデル)、

というのである（松井1990, 1996）。

- 4) 同じような立場から、携帯電話の機能を整理したものとして、Katz(1999)や中村(1997)など。しかし、これらが広範囲にわたって理論的な整理をしているのに対し、本論は特定の準拠点に絞って詳細かつ実証的な検討を行うことを目的としている。今後は、こうした理論的な整理と詳細な実証的検討をいくつも積み重ねていくことで、携帯電話の社会的機能に対する理解を深めていく必要があるだろう。

なお近年のメディア研究においては、このように携帯電話の社会的機能を明らかにすることを、「技術決定論」として批判する傾向があるが、これは大きな誤解である。なぜなら、あくまで本論の結論で示唆される社会的機能は、「一定の条件下において果たされる可能性がある」、というものであり、「いつでも、どこでも、誰にでも機能する」というものでは決してないからである。本論では、若者の友人関係に対して、というように準拠点を絞った上で分析を行っている。

こうした機能主義的な分析を「技術決定論」として批判する場合、おそらくこれまでの機能主義的なメディア研究が陥ってきた方法論上の欠点と、本来機能主義的なメディア研究がもつ理論的視座とを取り違えているように思われる。すなわち、いわゆる「効果研究」や「利用と満足研究」においては、統計的な分析結果をより精緻なものとするために、実験社会心理学的なアプローチへと邁進してきた嫌いがある。確かに、その分、社会的な諸条件に対する視座が欠落し、結果的にメディアの要因のみが強調され「技術決定論」的に見えてしまった感は否めない。しかしながら、竹内郁郎（1967=1990:78）が的確に指摘するように、機能主義的なメディア研究は、あくまで「明確な問題意識に支えられ、しかも確実な実証的分析手続きによって明らかにされた発見の、体系的な累積によってのみ」社会的機能を解明しようとするものであり、むしろ個別の社会的な諸条件ごとに、異なってくるメディアの社会的機能を実証的かつ累積的に明らかにすることを指向するのである。

よって、機能主義的なメディア研究に対して、社会的な諸条件への配慮が欠落して「技術決定論」的であるがゆえに、その可能性を否定的にとらえるような見方は明らかに誤解であるように思われる（例えば、吉見編2000など）。

- 5) 極端に値の大きい回答は分析の際に除外した。すなわち「携帯メールの送受信数」では200通以上、「携帯メモリーの登録件数」では500件以上、「グループ分け」では30グループ以上であり、いずれも1%に満たない割合であった。
- 6) この3段階の分け方は、森岡（2000）や大谷（1995）、辻泉（2003）などのパーソナル・ネットワーク研究における事例調査の結果を参考にしたものである。
- 7) 極端に値の大きい回答は分析の際に除外した。すなわち「親友」では110人以上、「知り合い程度の友だち」では250人以上である。「親友」については0.1%、「知り合い程度の友だち」では1%程度が該当した。
- 8) 筆者が携帯メモリーに登録された内容を分析した際には、友人関係の分析に限定したため、明らかにそれとわかる、友人とは異なる連絡先を除外して分析した。それが、家族や

自宅、店舗などであった（辻泉 2003）。

- 9) 宮台真司の一連の議論は、ジェンダー差に対する注意がやや欠落している傾向があることから、この点はむしろ注目すべきと考える。

文 献

- Allan, Graham, 1989, *Friendship: Developing a Sociological Perspective*, Harvester Wheatsheaf (=1993, 仲村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社。)
- 浅野智彦, 1999, 「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編, 『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣: 41-57。
- 遠藤由美著, 梅本堯夫・大山正監修, 2000, 『コンパクト新心理学ライブラリ 10 青年の心理 ゆれ動く時代を生きる』サイエンス社。
- 藤村正之, 1998, 「メディア環境と子ども・若者たちの身体-背景・言説・感覚-」『教育社会学研究』63: 39-56。
- 橋元良明, 2003, 「若者の情報行動と対人関係」正村俊之編『講座・社会変動 6 情報化と文化変容』ミネルヴァ書房: 26-56。
- 正高信男, 2003, 『ケータイを持ったサルー「人間らしさ」の崩壊』中央公論新社。
- Katz, J. E., 1999, *Connections: Social and Cultural Studies of the Telephone in American Life*, Transaction Publishers.
- 松井豊, 1990, 「友人関係の機能」菊池章夫・斎藤耕二編, 『ハンドブック社会化の心理学』川島書店: 283-296。
- 松井豊, 1996, 「親離れから異性ととの親密な関係の成立まで」斎藤誠一編『人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係』培風館: 19-54。
- 松田美佐, 2000, 「若者の友人関係と携帯電話利用-関係希薄化論から選択的関係論へ」『社会情報学研究』4: 111-22。
- 宮台真司, 1994 『制服少女たちの選択』講談社。
- 水野博介・辻大介, 1996, 「若者の意識と情報コミュニケーション行動に関する実証研究 (1)」『埼玉大学紀要教養学部』32-2: 35-66。
- 森岡清志編, 2000, 『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会。
- 中村功, 1997, 「生活状況と通信メディアの利用」水野博介・中村功・是永論・清原慶子『情報生活とメディア』北樹出版: 80-114。
- 内閣府政策統括官(総合企画調整担当) 編, 2002, 『情報化社会と青少年-第4回情報化社会と青少年に関わる調査報告書』。
- 小原信, 2002, 『iモード社会の「われとわれわれ」-情報倫理学の試み』中央公論新社。
- 尾島史章, 2001, 『現代高校生の計量社会学 進路・生活・世代』ミネルヴァ書房。
- 岡田努, 1992, 「友人とかかわる」松井豊編『対人心理学の最前線』サイエンス社: 22-9。
- 小此木啓吾, 2000, 『「ケータイ・ネット人間」の精神分析-少年も大人も引きこもりの時

代』飛鳥新社。

大谷信介, 1995, 「〈都市的状況〉と友人ネットワーク—大都市大学生と地方都市大学生の比較研究」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房。

柴野昌山, 1990, 『改訂版 現代の青少年 自立とネットワークの技法』学文社。

総務庁青少年対策本部, 1991, 『青少年の友人関係』。

総務庁青少年対策本部, 1995, 『青少年の意識の変化に関する基礎的研究—「青少年の連帯感などに関する調査」第1回～第5回の総括—』。

総務庁青少年対策本部, 2000, 『青少年と携帯電話等に関する調査』。

竹内郁郎, 1967=1990, 「マス・コミュニケーションの機能」『現代社会学叢書 マス・コミュニケーションの社会理論』東京大学出版会:41-88。

田村紀雄, 2000, 『電話帳の社会史』NTT出版。

辻大介, 1999, 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版:11-27。

辻泉, 2001, 「今日の若者の友人関係における構造, 意味, 機能—アイドルのファンを事例として」『社会学論考』22:81-106。

辻泉, 2003, 「携帯電話を元にした拡大パーソナル・ネットワーク調査の試み—若者の友人関係を中心に」『社会情報学研究』7:97-111。

辻泉, 2004, 「ケータイは何の役に立つのか?—若者の友人関係を中心に」『都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析』(平成13・14・15年度科学研究費基盤研究A-1報告書:研究代表者高橋勇悦)。

山本真理子, 1986, 「友情の構造」『人文学報 心理学27』183:77-101。

吉見俊哉・若林幹夫・水越伸, 1992, 『メディアとしての電話』弘文堂。

吉見俊哉編, 2000, 『メディア・スタディーズ』せりか書房。

本稿は, 2003年度松山大学特別研究助成金による研究成果の一部である。